

# バリ・ヒンドゥー村落の家族・親族の継承 と系譜

—タバナン県G慣習村  
の2つのバンジャール(部落)の事例—

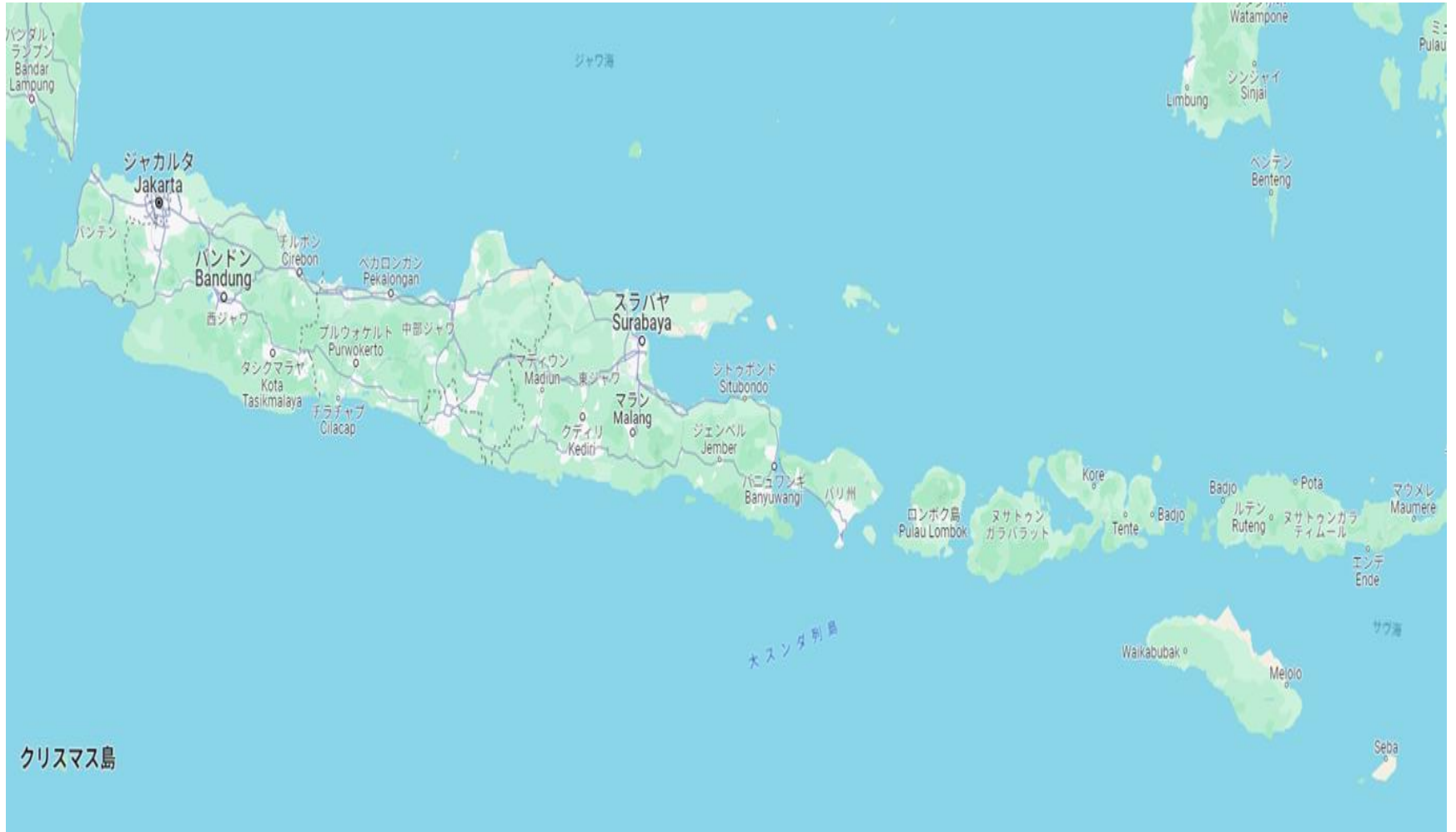
専修大学 永野由紀子

# 報告のねらい

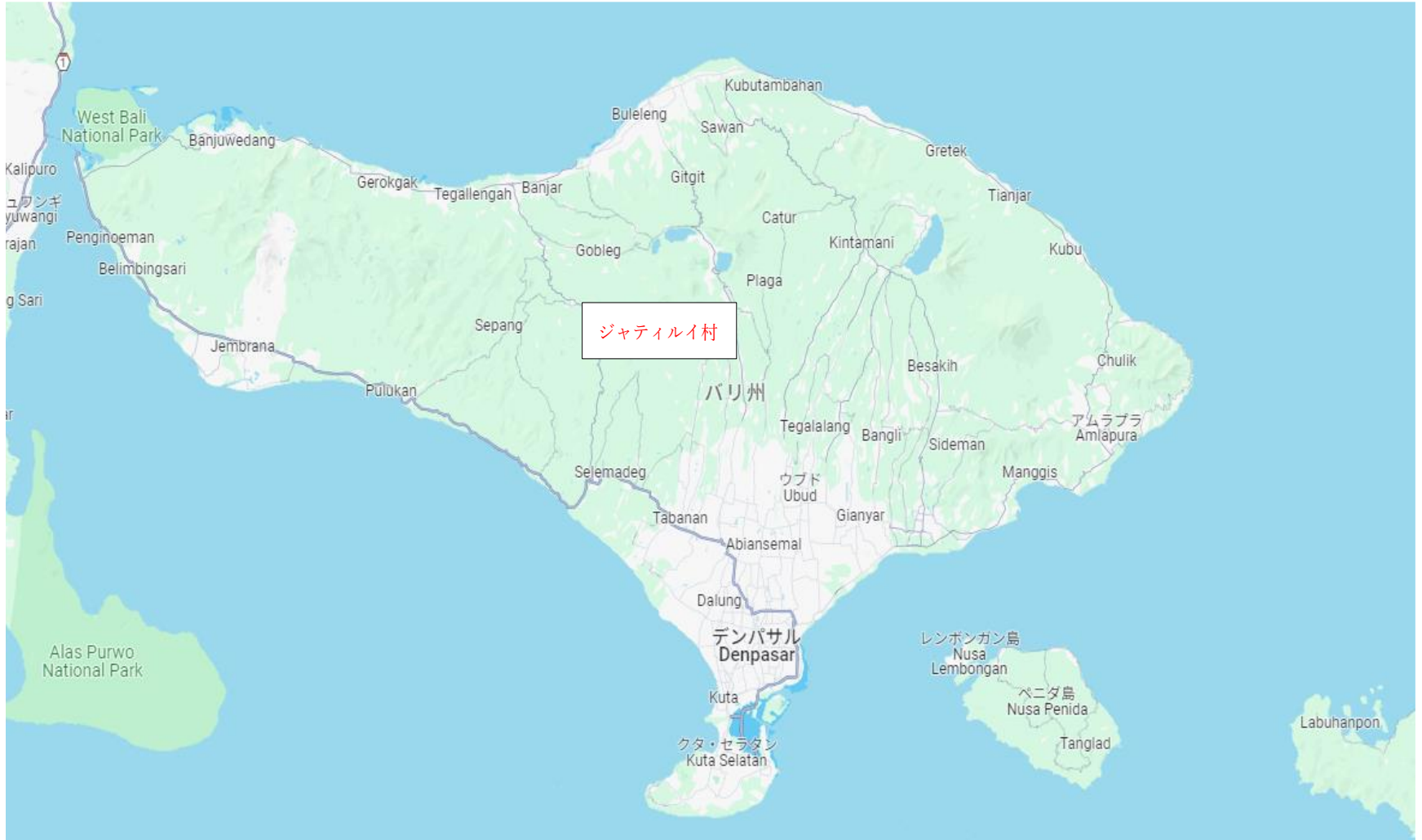
- ◇本報告では、インドネシア・バリ島を事例に、〈今・現在〉のバリ・ヒンドゥー村落の家族・親族を継承の観点から分析する。
  - 文字や図として記録された系図・系譜ではなく、農村住民をインフォーマントとするヒアリングにもとづく庶民の生活実態としての継承(家屋・屋敷地の継承, 農地相続, 社会的地位の継承, 祖先祭祀, 婚姻規制, 婚姻後の居住地, 老親扶養, 通過儀礼など世代連続的な生活慣行)を扱う。
- ◇対象地: バリ州タバナン県プヌブル郡ジャティルイ村にあるG慣習村の2つのバンジャール(部落)



# 対象地の位置



# 対象地の位置



# 対象地域の概要

- ・タバナン県：バリの「米どころ」といわれる水田稲作が盛んな地域
- ・ジャティルイ村（永野2012）  
棚田村（バトゥカウ山の山麓700～1000mに位置する）  
豊かな水とよく管理された肥沃な棚田  
市場や雇用先がある町から離れている。  
小学校は徒歩通学できるが、中学校は隣のスnganan村にバイク通学。高校から下宿。観光ルートからもはずれていた。



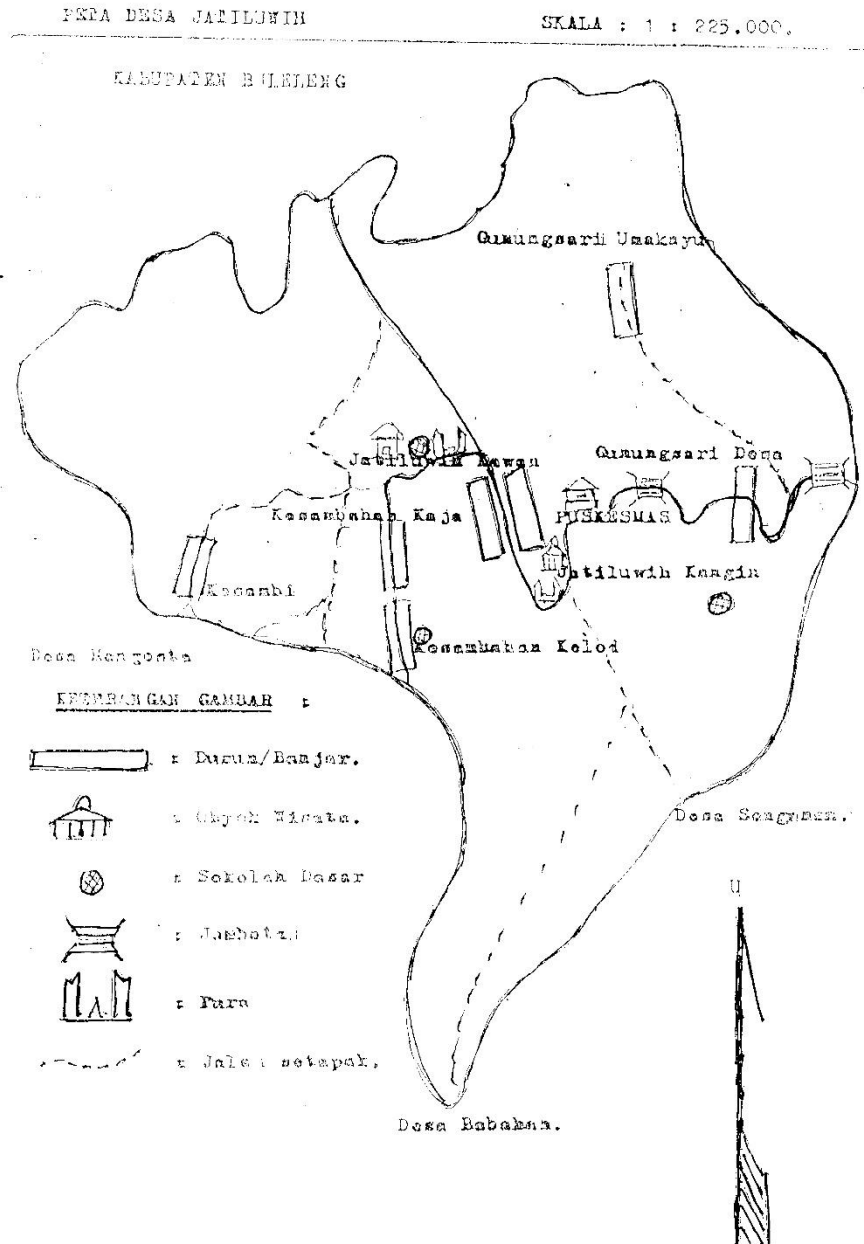
基幹産業として水田稲作が存続  
→経済的には豊かな村落。頻繁な帰省。Uターンが多い。

- ・2012年7月に文化的景観として世界遺産に登録
- ・短期間で大きく変化。だが、相続（男子均分相続，養子，娘婿）・婚姻（イトコ婚とバンジャール（部落）内婚の多さ）・通過儀礼（葬送儀礼）・村落組織の成員資格（既婚男子に代表される一組の夫婦，夫婦家族単位）等々の家族・村落生活に関わる慣行が急激に変わるわけではない。

# ジャティルイの棚田



# 図1 ジャティルイ村の地図

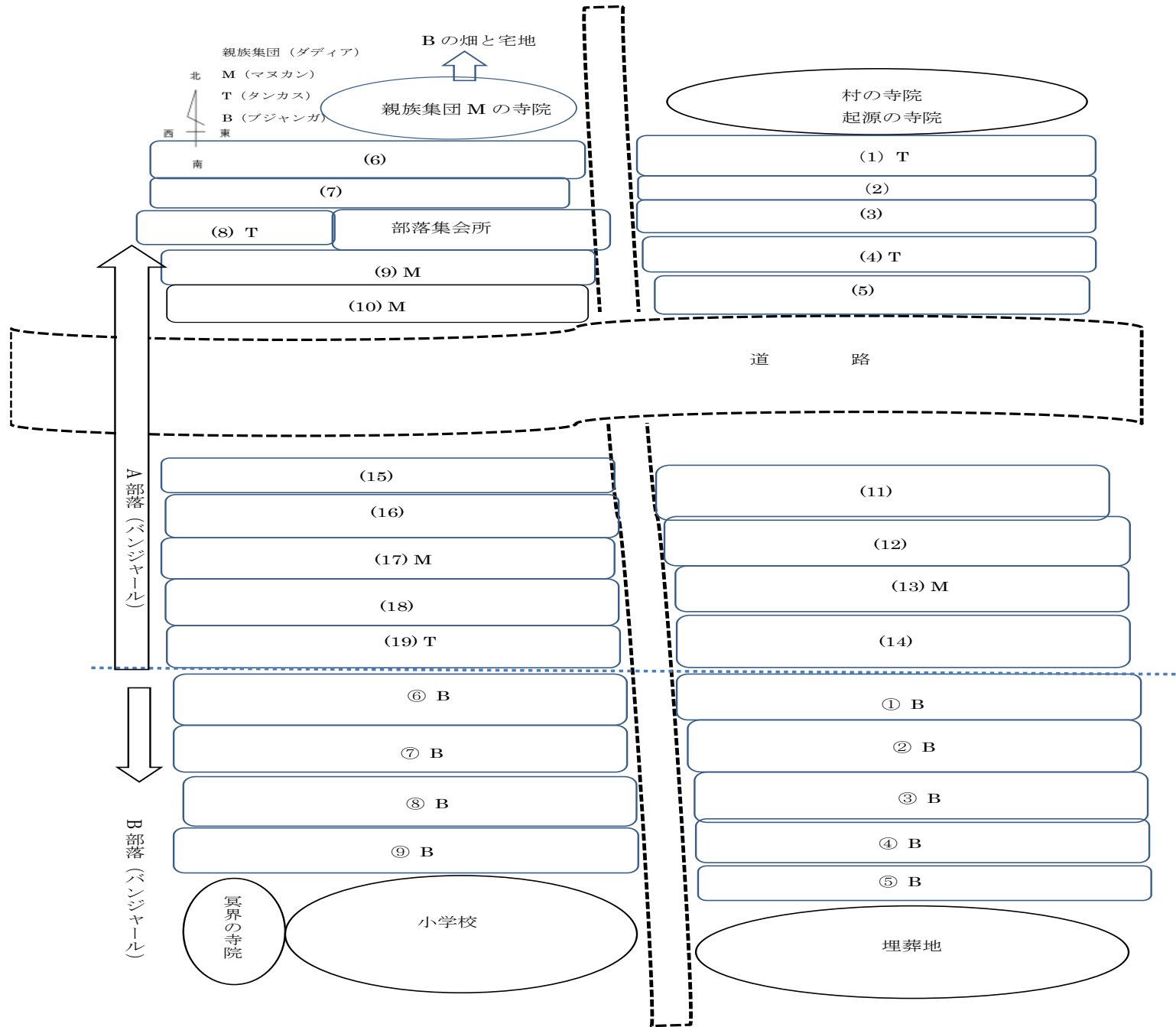




# グヌンサリ慣習村の集落



# 図2 G慣習村の2つのバンジャール(部落)の屋敷地



# 慣習村・バンジャール(部落)・屋敷地

- 慣習村:バリ・ヒンドゥーの信徒集団, カヤンガン・ティガ(村の寺院, 起源の寺院, 冥界の寺院という3つの寺院)を共有(管理と祭礼), 埋葬地  
→ 構成員の範囲はバンジャールより大きく複数のバンジャール(部落)から構成されることが多い

- バンジャール(部落):バリ・ヒンドゥーにとってもっとも重要で帰属意識の高い近隣集団  
行政機能(行政区, 大字)および農業生産機能(水利組合スバック)とは区別されたバリ・ヒンドゥーの慣習的・宗教的機能(=葬送儀礼を中心とする人生儀礼における相互扶助)を遂行する近隣集団

慣習村とバンジャールの成員資格:どちらも既婚男子に代表される一組の夫婦。息子の一人が結婚すると両親はリタイア。男子は平等

慣習村とバンジャールの関係:行政村と行政区の関係のような上位・下位(全体・部分)の関係ではなく, 慣習村の構成単位はバンジャール。

祭礼の準備作業や集金は, 各バンジャールに任されている。



→ 村内メンバーよりも村外メンバーのほうが多い。週末の頻繁な帰省や大きな祭礼・儀礼時の帰省。バンジャール内の結婚が今日でも非常に多い。

ex) ギアニャル県ボナ慣習村の婚姻:慣習村内72%,バンジャール内57% [1991年](鏡味2000:35頁)

- 屋敷地:屋敷寺院を共有する父系的親族集団。石や土の壁で区画(10~30アール)。複数の家屋(大きな屋敷地は10~15家屋)。  
複合大家族が屋敷地内および周辺に共住。畑の家屋(ポンドック=小屋):屋敷地や家屋が狭小になると畑に家屋を新築して世帯を分出  
屋敷地と畑の家屋(ポンドック)の関係:屋敷地内の親族集団よりも近親関係にある。屋敷寺院を共有する集団として出身者は結合  
cf. 東北タイの屋敷地共住集団(結合)との類似性(水野:1981)  
祖霊神を祀る出自の屋敷寺院を共有する父系的傾向をもつバリ・ヒンドゥーの祭祀集団・親族集団 (永野:2022)

# ダディアとカスタ(階層)

- ・ **ダディア**: 父系的親族集団, バンジャール内の屋敷地連合  
(Geertz, H and Geertz, C.: 1975): 父系的親族集団「男系的で内婚が好まれる」, 「広範囲に分散している一つの称号集団—つまり同じ階位の称号をもった人びとの集団—のうちの—地域の分派」。  
「ある村にこの集団が存在するか否か, 重要な機能を果たしているかによって, 村の構造, 機能は大きな影響を受ける」(間苧谷: 2000, 156)  
cf. 中国の宗族(同姓不婚) ×, ベトナムのゾンホ(村内集団○, 姓 ×)  
日本の同族団(村内集団○, イエ連合 ×)
  - ・ **バリ・ヒンドゥーの階層(カスタ)**は、人口の10%を占める貴族層(トリワンサ: ブラフマーナ、サトリア、ウェシアの3つのカスタ)と90%を占める平民層(スードラ)である。上位階層の屋敷寺院はムラジャン、平民層の屋敷寺院はサンガという。  
cf. インドのカースト制との違い: 不可触民 ×, 婚姻の禁忌: 弱, 職業 ×
- 平民も父系的に継承される称号をもつ。称号集団はバリ島全土に広がる。ダディアは同一の称号集団であるが, その範囲はバンジャールを超えることはない。
- ex) ブラフマナ(イダ・バグス, イダ・アユ), サトリア(デワ・アグン, アナック・アグン, チョコルダ), ウェシア(グスティ)  
スードラ(イ・ニ, ワヤン, マデ, ニョマン・クトゥなど出生順を表す名前。子供が生まれると○○の父, ○○の母。貴族層のように称号で呼びかけられることはない)
- ・ **婚姻の禁忌(カスタ・称号の違い)**: 男性が低いカスタの女性と結婚することは認められている。だが, 女性が低いカスタの男性と結婚することは許されない  
(最上位階層のブラフマナ階層の女性の選択の幅がもっとも狭い) (中谷2014)

## 2つのバンジャール(部落)とダディア([父系的]親族集団)

集落的な景観:①②は連続

①A部落(バンジャールA)(屋敷地19+畑の家屋[ポンドック])

148世帯(KK)512人(行政:2017年5月時点)

19の屋敷地のうち11の屋敷地はどのダディアにも属さない。ダディアは1つ。ダディア・マヌカンは、4つの屋敷地の出身者。慣習村の寺院の向かいに大きなダディア寺院をもつ。もうひとつはダディアではないが、称号集団タンカスに属する4つの屋敷地の出身者。A部落の住民は、ダディア・マヌカン、称号集団タンカスのメンバーも含めて全住民が平民階層(スードラ)。

②B部落(バンジャールB)(屋敷地9+畑の家屋[ポンドック]が多い)

97世帯(KK)+85世帯(KK)=182世帯(KK)616人(行政)

B部落の9の屋敷地とポンドックのメンバーは全員同じダディア(称号集団ブジャンガ)のメンバーで上位階層(ブラフマーナ)。ただし、イダ・バグス、イダ・アユ等の称号はもたない。

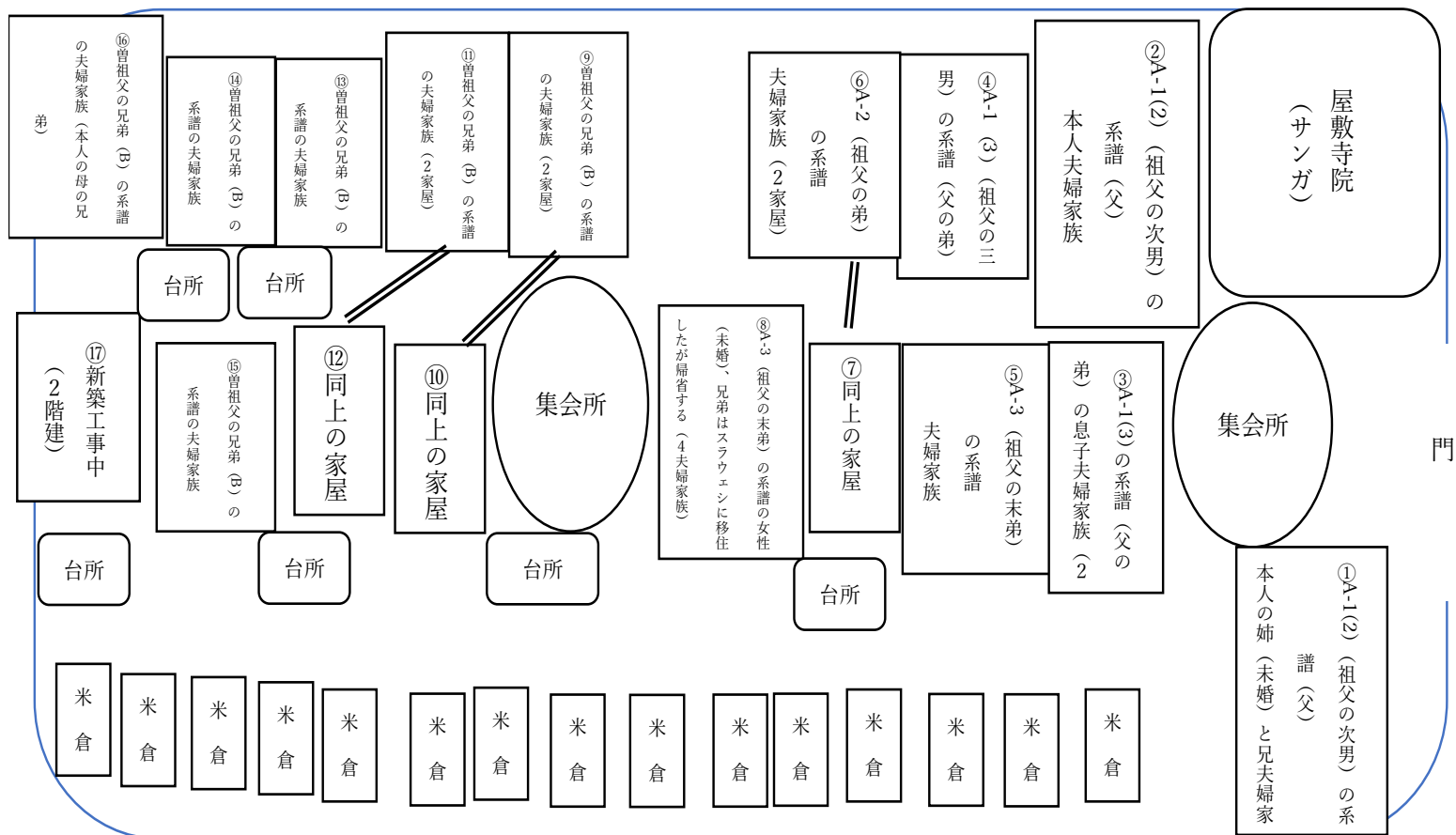
称号集団ブジャンガは、15世紀マジャパイト王国の貴族層とは異なる系譜の貴族層(称号集団)(永淵2005)。バリ島全土に広がる。

ダディア・ブジャンガは、ダディア寺院=バンジャール寺院をもつ。

# 事例1：バンジャールAの屋敷地⑱(称号集団タンカス)

事例1：バンジャールA(屋敷地⑱)(13アール)

集会所2, 家屋17, 米倉15, 台所6

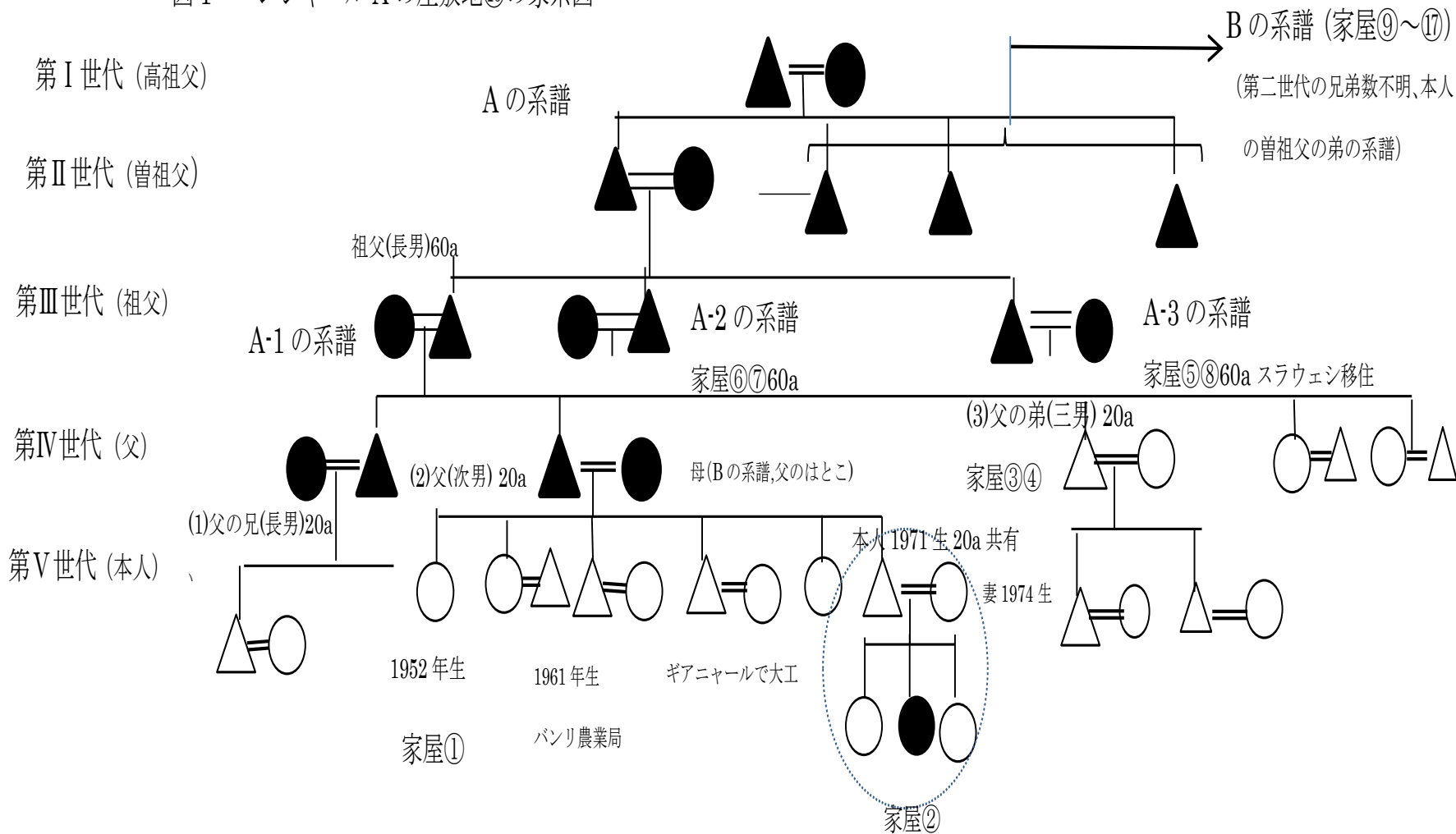


# 屋敷寺院の写真



# 事例1：バンジャールAの屋敷地⑬の家系図（称号集団・タンカス(T)）

図1 バンジャールAの屋敷地⑬の家系図





# バンジャールAの屋敷地①9

## ◇称号集団タンカスの屋敷地

1971年生, 高卒, 慣習村長(2016~), 農業と大工の兼業。

## ◇農業

自作20アール(3人兄弟の共有)+小作2ヘクタール。1952年生まれの未婚の姉が農業を手伝う。

## ◇家族

1994年結婚:妻(1974年生、シンガラジャヤ出身、小学校卒)

子供は3人で全員女子(長女1994生、次女2000生(2017死亡)、三女2005生)

## ◇親族(家系図スライド16)

6人兄弟姉妹の末子で男子3人の三男。父は2001年死亡。母は2008年死亡。母は父のはとこで、同じ屋敷地の出自だが、畑の仕事があるのでポンドックで育てられた。両親には子供が6人おり、本人は第6子(末子で男兄弟3人の三男)第1子(1952年生の長女=本人の長姉)は未婚で、同じ屋敷地の家屋に住み、本人のKKの一員。第2子(1960年生の次女=本人の次姉)は、隣村の男性と結婚して農業している。第3子(1961年生の長男=本人の長兄)は、既婚でバンリの農業局に勤める公務員。第4子1965年生の次男=本人の次兄)はギアニヤールで大工。第5子(1968生の三女=本人に近い末姉)は、未婚でデンバサールで仕立てをしている。

本人の曾祖父には息子が3人いる。本人の祖父は、曾祖父の長男。祖父には子供が5人おり、男子は3人。本人の父は、祖父の次男。

## ◇屋敷地(スライド14)

曾祖父の兄弟(子孫)、祖父の兄弟や父の兄弟の親族が居住。

屋敷地13アール。本人家族は2家屋あり、道路に一番近いところ。本人家族の居住する家屋の他に未婚の姉とバンリとギアニヤールに住む兄2人の家族が儀式で帰ってきたときに泊まる家屋がある。奥に行くほど、祖父の兄弟や曾祖父の兄弟の家屋があり、一番奥は母の兄弟(はとこ)の家屋がある。17家屋。米倉。儀式用の集会所2つ。70年代に父の従弟たちが広い土地がもらえるとのことでスラウェシに移住し、1954年生の未婚の女性(本人のはとこ)が一人で住む家屋もある。移住した家族(4KK)もノンアクティブメンバーとして帰省している。

## ◇慣習村長就任前

・2009~2016(2019)年 バンジャールAの代表だったが、2期の途中で慣習村長になったのでやめた(2016?)。これからも慣習村長としてBPDに参加する(次の任期が2019?)。

・シンガラジャのルピナ・ビーチで観光業(ガイド)に勤めたことがある。高卒後は、ギアニヤールで彫刻家としての修業をした。2人の兄がジャティルイではないところに家を建てたので、1994年に結婚した時に両親と一緒に住むため戻ってきた。子供のころから農業もしていた。

◇妻(1974生):シンガラジャの町の出身。台所は最初義親と共同。今は義姉と共同。夫がこちらに戻ってきたのも兄弟でアダット(慣習)の活動をするメンバーが一人もいないのは問題と考えたから。大きなダディアがあり、夫が積極的に参加しているので、お供えの勉強をした。

# 事例2:バンジャールAの屋敷地④の系図(称号集団タンカス(T):屋敷寺院グデ)

屋敷地(4)称号集団タンカスの一番古い屋敷寺院がある屋敷地。

屋敷地4(?)アール:家屋10棟(2棟は空き家)。8世帯が居住。米倉8(各世帯1。農業をしていなくても小作料を納める倉は必要)。

インタビュー対象者:家屋③1965年生,中卒,デンパサール市の電気製品の店で10年間働く。1991年結婚(妻はタバナン県クディリ郡出身)。  
1994年 ジャティルイに戻ってきて父と2人で農業。2003年 父死亡

家族:本人は5人兄弟の長男(第1子長女は死亡、第2子次女は結婚、第3子長男が本人、第4子三女は結婚、第5子次男(本人の弟))で、男子は本人(家屋③)と弟(家屋④)の2人

屋敷地(4)の8家屋に居住する家族

①父の兄(伯父)の子供(従兄弟)夫婦家族(伯父には5人の男子があり第4子の男子)4人

②父の兄(伯父)の子供(従兄弟)夫婦家族(伯父には5人の男子があり第5子の男子)2人。

※伯父の5人の子供のうち第1子から第3子まではスマトラ在住(移住)。

③本人夫婦家族3人と母の4人。

④本人の弟夫婦家族4人⑤⑥⑦⑧は屋敷寺院を共有しているので父方親族であることは間違いない。だが、遠い関係なのでどういう関係かは分からない。父の従兄弟の子供ではないので、祖父の従兄弟か曾祖父の従兄弟と思われる。

①水田所有地25アール(自作25アール)、小作25アール(②から経営受託)

②水田所有地25アール(②に経営委託)、養鶏(従業員4人)

③本人は水田所有地25アール(自作25アール、小作14アール(⑤の父方親族から経営受託))、畑25アール

④弟は水田所有地25アール(自作25アール)。

⑤水田所有地64アール(うち14アールを④に経営委託。50アール自作)

⑥水田所有地50アール(50アールを同じバンジャールの人に経営委託)、養鶏(雌鳥7000羽、従業員2人)

⑦水田所有地50アール(50アールを同じバンジャールの人に経営委託)、畑50アール。雑貨屋経営(ジャティルイの道路沿いのワルン)

⑧水田所有地50アール(自作50アール)、畑50アール

→①と③と④と⑤と⑧は農民(水利組合のメンバー)

◇家屋⑧に居住する寡婦

同じバンジャールAの出身。夫は2人兄弟で次男。夫の兄(長男)の息子(長男の長男)夫婦2人が⑦に住んでいる。

⑧本人夫婦には子供が生まれなかったので、夫の兄(長男)のもう一人の息子(次男)を養子にした

※慣習村長におよると、インタビュー対象者(家屋③)の所有する水田は25アールで小さい。本人の弟が(慣習村長の弟のように)男の子のいない親族(父の兄弟)の養子になれば、対象者も50アールの水田を経営できた。

### 事例3:バンジャールAの屋敷地①(称号集団タンカス(T))

- 屋敷地:10アール。家屋3棟。米倉4
  - インタビュー対象者:1958年生, 電話局(フローレンス, デンパサール)に18年間勤務。1999年に早期退職してジャティルイ戻る。ジャティルイ水利組合長プカセ就任(1999年~2009年6月任期途中), G慣習村長就任(2007~2012年任期5年予定, 2010年12月退任)
  - 親族:父は4人兄弟(男3人女1人)の3男。本人は2人兄弟(男2人)の長男。弟(父の次男)は子供のいない伯父(父の兄・祖父の長男)夫婦の養子になった。
  - 家族:妻(1959年生)で同じバンジャールA(屋敷地⑮ダディア・マヌカン)出身。本人の子供は2人(長男と長女)。長女は結婚して隣のジャティルイ慣習村のバンジャールに住んでいる。長男(1984年生)は、現在デンパサール市の航空機械会社に勤めている。
  - 屋敷地の家屋
    - 家屋①伯父(祖父の長男)夫婦と本人の弟(伯父の養子)夫婦の4人家族。
    - 家屋②伯父夫婦(祖父の次男)と伯父の息子夫婦とその子供(娘)の5人家族。
    - 家屋③父(祖父の3男)母と本人夫婦との4人家族。
  - 農地と農業
    - ①水田所有50アール(自作地50アール, 小作地100アール)。米倉2。
    - ②水田所有50アール(自作地50アール)。米倉1。
    - ③水田所有50アール(自作地と1ヘクタールの小作地[うち60アールは同じバンジャールの屋敷地⑧の親族の所有])。米倉1。
- ↓
- ◎ この屋敷地は祖父の世代からの居住(屋敷地④か⑱の出自?)。

# 事例4:バンジャールAの屋敷地⑧の 系図(称号集団タンカス(T))

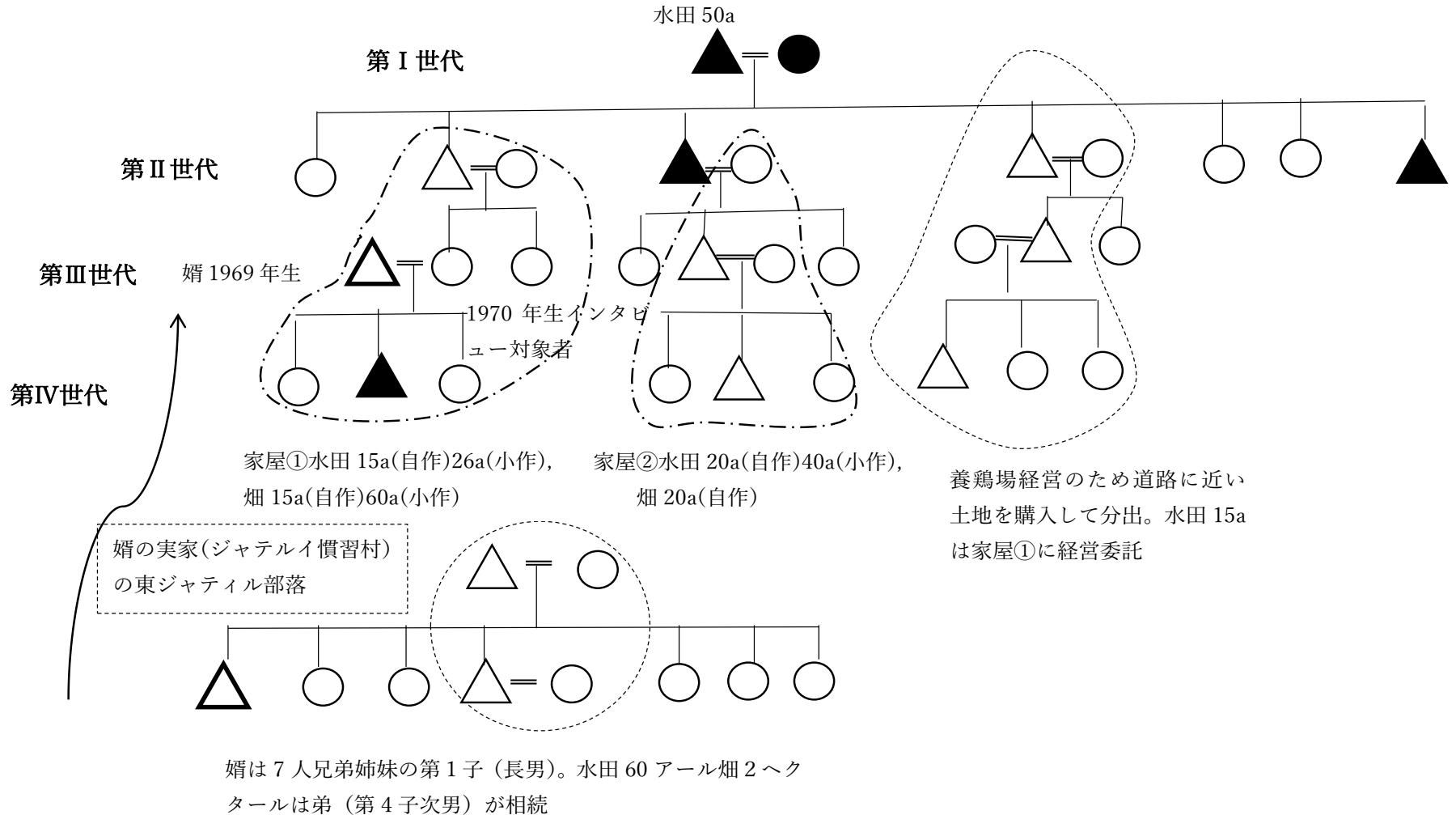
- 屋敷地(8)集会所の後ろ(6)兄弟(弟は千葉で農業の経験あり)  
インタビュー対象者:1970年生,大卒(ジョグジャカルタ)
- 屋敷地4アール:母と伯母(父の姉で未婚)と本人と妻(シガラジャ出身,1978年生)と弟(未婚)の5人家族。2005年に父(65才)で死亡
- 水田の所有:120アール(60アール自作、60アール屋敷地①の親戚に経営委託)。
- 弟は未婚なので水田も米倉も分割していない。弟は畑15アール(とうがらし,年2回収穫)と養豚20頭。弟は日本が好きで計7年間日本で働いていた。うち3年間は千葉の農家(水田とハウス)で研修生として働いていた。日本語ができるが、観光ガイドよりも農業がすき。時間が自由になるし、人に使われるのではなく、自分の思い通りにできる。



◎この屋敷地は父の世代からの居住(屋敷地④か⑱の出自?)

# 事例5:バンジャールAのポンドック(称号集団タンカス(T))

図3 事例5 グヌンサリ・デサ部落の宅地(ポンドック) 称号集団



## 事例5:バンジャールAのポンドック(称号集団タンカス(T))

◇ポンドックの屋敷地8アール 家屋2, 黒砂糖の加工

インタビュー対象者:あととり娘(1971年生,長女)と婿(隣の慣習村のジャティルイ・カンギン部落出身,1969年生)

2つの家屋に父系親族が居住している。

あととり娘の父は8人兄弟(長女、①長男、②次男、③三男、次女、三女、四女、三男(死亡))で男子3人の長男。

祖父は50アールの水田を所有していた。3人兄弟だったので①②③で分割相続。

家屋①は父(長男)と母とあととり娘夫婦と未婚の妹(次女)と子供2人(長女19才、次女13人)の7人家族。本人の子供も女の子ばかりなので長女が婿をとる予定。

家屋②は父の弟(次男、叔父Ⅰ)の息子(長男、3人兄弟で男子は1人)夫婦家族。叔父は死亡。叔父の母と叔父の長男夫婦(妻はヌガラ出身)とその子供3人(長女、長男、次女)の6人家族K。

③父の弟(三男、叔父Ⅱ)の家族は、バンジャールAの道路に近いところに屋敷地を買って住んでいる。父の弟夫婦とその長男夫婦とその子供3人(長男、長女、次女)。養鶏をしているので道路に近い方が便利。

家屋①水田所有15アール(自作15アール 小作26アール(うち15アールは③の水田)、畑15アール 小作60アール

家屋②:水田 自作20アール 小作40アール 畑20アール

③は水田所有15アールで①にすべて小作にだしており、農業はしていない。

家屋①の婿の実家:。夫は7人兄弟の長男(夫は第1子で長男。妹が5人、弟(次男)1人)。水田60アール、畑2ヘクタール。実家の農地も屋敷地も弟が継いでいる。婿はy嫁と同じで相続権はない。



◎この屋敷地は祖父の世代からの居住(屋敷地④か⑯の出自?), 黒砂糖加工の便宜

# 事例1～5 称号集団タンカス

- 屋敷地④の屋敷寺院(グデ)を共有するバンジャール内の称号集団タンカス
- 屋敷地⑱も同様に古い:高祖父の代  
屋敷寺院の位置(山側で門側), 米倉の位置(海側),  
家屋の位置は曾祖父の長男(A)の系譜が門側, 曾祖父の次男以下の(B)の系譜が門から遠い側。農地・屋敷地・家屋は男子均分相続。屋敷地の家屋の位置は長男, 次男・・・と男子の出生順。
- 屋敷地①とポンドックの家屋(畑の屋敷地):祖父の代
- 屋敷地⑧:父の代
- 隣の慣習村のバンジャールの1つの屋敷地も称号集団タンカスのメンバー
- 称号集団タンカスは, バリ全土に広がる。バンジャールAの称号集団タンカスは, 父系的親族集団ではあるがダディアとはいえない(屋敷地の外のバンジャールの土地にダディア寺院がない)。
- 称号集団タンカスからは, 慣習村長が2人でている。

## ダディア・マヌカン(M)について

慣習村長：バンジャールAのダディアはひとつだけ。村寺院の向かい側にダディア寺院がある。4つの屋敷地（屋敷地⑨⑩⑬⑰）の親族集団がメンバーである。全員スードラ（平民層）。ダディア寺院の儀式のときは4つの屋敷地のメンバーが集まる。4つの屋敷地のあいだの上下関係はない。

「お寺をたてるぐらいのダディアだから昔は裕福だったのだろうが・・・。1970年代は、この屋敷地のメンバーはエリートで、ジャティルイ行政村長をだしたこともある。農地の面積も大きくない。高学歴でもない。今はむしろ・・・」。



## 事例6:バンジャールAの屋敷地⑩(ダディア・マヌカン(M))

### 6. 屋敷地(10)

インタビュー対象者:家屋⑨ 1952年生 65才

屋敷地:16アールに9家屋(①と⑥⑦⑧⑨はSubak Gunung Sari ②③④⑤はSubak Senganan) Subak Senganan

①夫婦2人。スバック・グヌンサリのメンバーで、水田1.5ヘクタール畑2ヘクタール。子供2人がどちらも女の子で、結婚して他出した。婿養子が見つからなかった。

②親夫婦と長男夫婦と次男夫婦の6人が住んでいる。スバック・スンガナンのメンバーで水田2ヘクタール畑5ヘクタール。

③夫婦と息子2人の4人。水田2ヘクタール畑5ヘクタール

④親夫婦と息子夫婦と孫2人(孫長男と孫長女)の6人。水田2ヘクタール畑5ヘクタール

⑤親夫婦と長男夫婦とその息子(孫長男)と次男夫婦と長女の8人。水田2ヘクタール畑5ヘクタール

⑥夫婦2人1KK。子供は皆デンパサールに住んでいる。スバック・グヌンサリのメンバーで水田80アール畑60アール。

⑦夫婦2人1KK。子供は皆出稼ぎ。スバック・グヌンサリのメンバーで水田80アール畑60アール。

⑧独身の女性1人。兄弟はいたが皆どこかにいっている。スバック・グヌンサリのメンバーで水田80アール畑60アール。

⑨本人家族:本人と父(100才近い)と妻(65才、妻は隣の慣習村のBr Jati Luwih Kauh出身)、長男(1976年生)と長男の妻(ジュンブル出身のジャワ人)と孫長男(2(3)才)、次男(1978年生)と次男の妻(1978年生、次男とは小学校から高校までのクラスメート。同じバンジャールの出身)と孫長男(6才)と孫長女(1ヶ月)の10人家族。同じ家屋に住んでいる。寝室は夫婦家族ごとに4部屋ある。台所は共有。

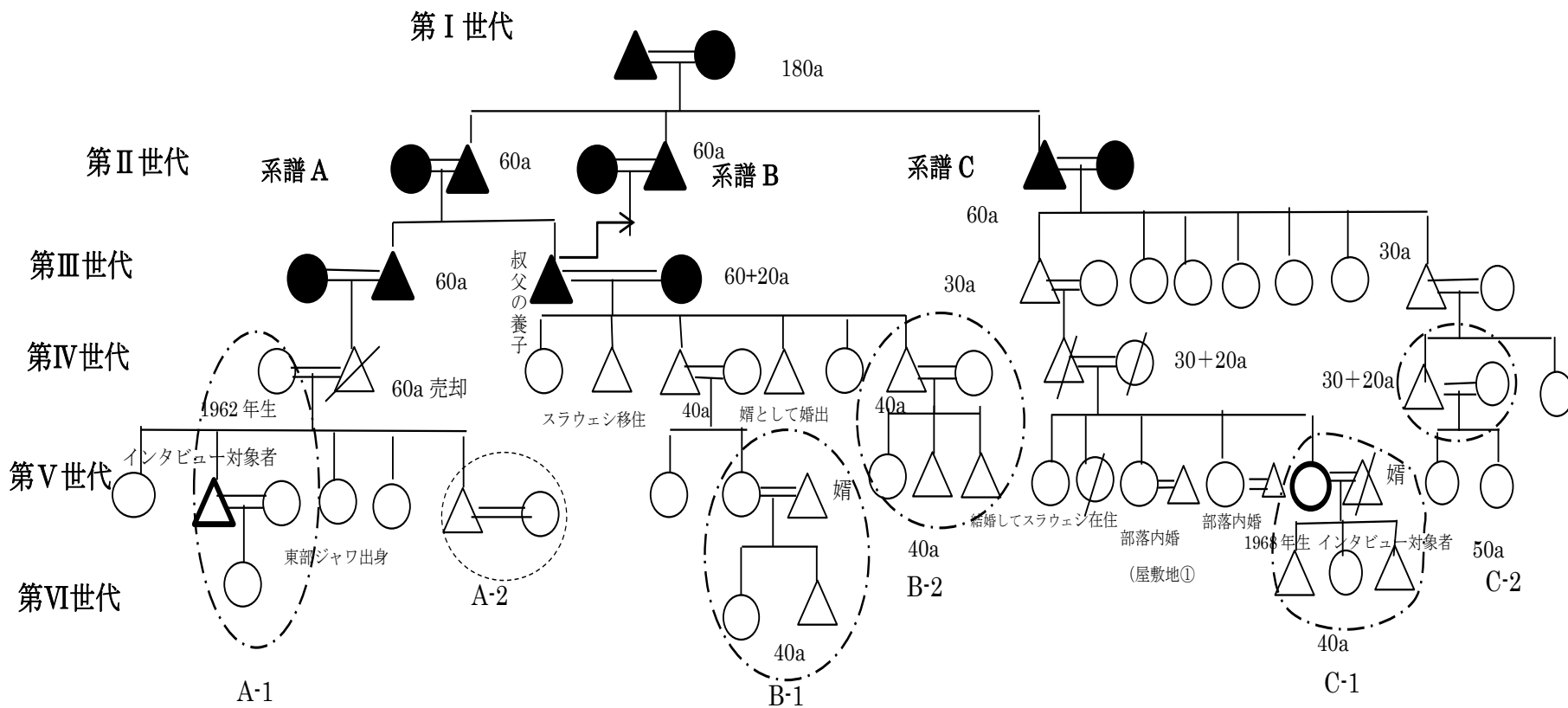
長男夫婦は父と一緒に水田の仕事を手伝っているが、次男夫婦は養鶏舎(雌鳥1万5千羽の採卵、従業員30人程度)で雇用労働者として働いている。

①から⑧までと⑨の関係はわからない。屋敷寺院を共有する父系親族であることは間違いない。父のいとこ(祖父の兄弟)でもない。。。

4つの屋敷地のダディアのメンバーは他のバンジャールの人よりも近いという感覚はある。

# 事例7:バンジャールAの屋敷地⑬ (ダディア・マヌカン(M))

図4 事例7バンジャールAのダディア・マヌカンの屋敷地⑬:2012年8月時点



## 事例7:バンジャールAの屋敷地⑬ (ダディア・マヌカン(M))

- インタビュー対象者:家屋A1, 1962年生, 中学校教員, ジェロマンク
- 屋敷地30アール〔家屋6〕
- A1(第V世代)本人夫婦家族(本人と妻と娘と母4人)、A2弟夫婦家族(2人デンパサール)、B1(第V世代)娘婿夫婦家族4人(40アール自作、兼業:彫刻)、B2(第IV世代)四男夫婦家族5人(40アール自作、兼業:林業)、C1(第V世代)五女夫婦家族4人(婿は死亡、子供3人)40(50)アール自作、C2(第IV世代)第Ⅲ世代の次男夫婦家族4人(デンパサール在住、米倉はある)。

# 事例7:バンジャールAの屋敷地⑬

## (ダディア・マヌカン(M))

祖父は息子(父)が1人だったので、第Ⅲ世代の本人の父は60アールの水田を相続した。〔同じ屋敷地の父系親族の3家族(第Ⅱ世代曾祖父の次男の系譜の第Ⅲ世代(祖父の弟が養子)の1家族と第Ⅱ世代曾祖父の三男の系譜の第4世代の息子2人の家族)に各20アールずつ売却した。〕

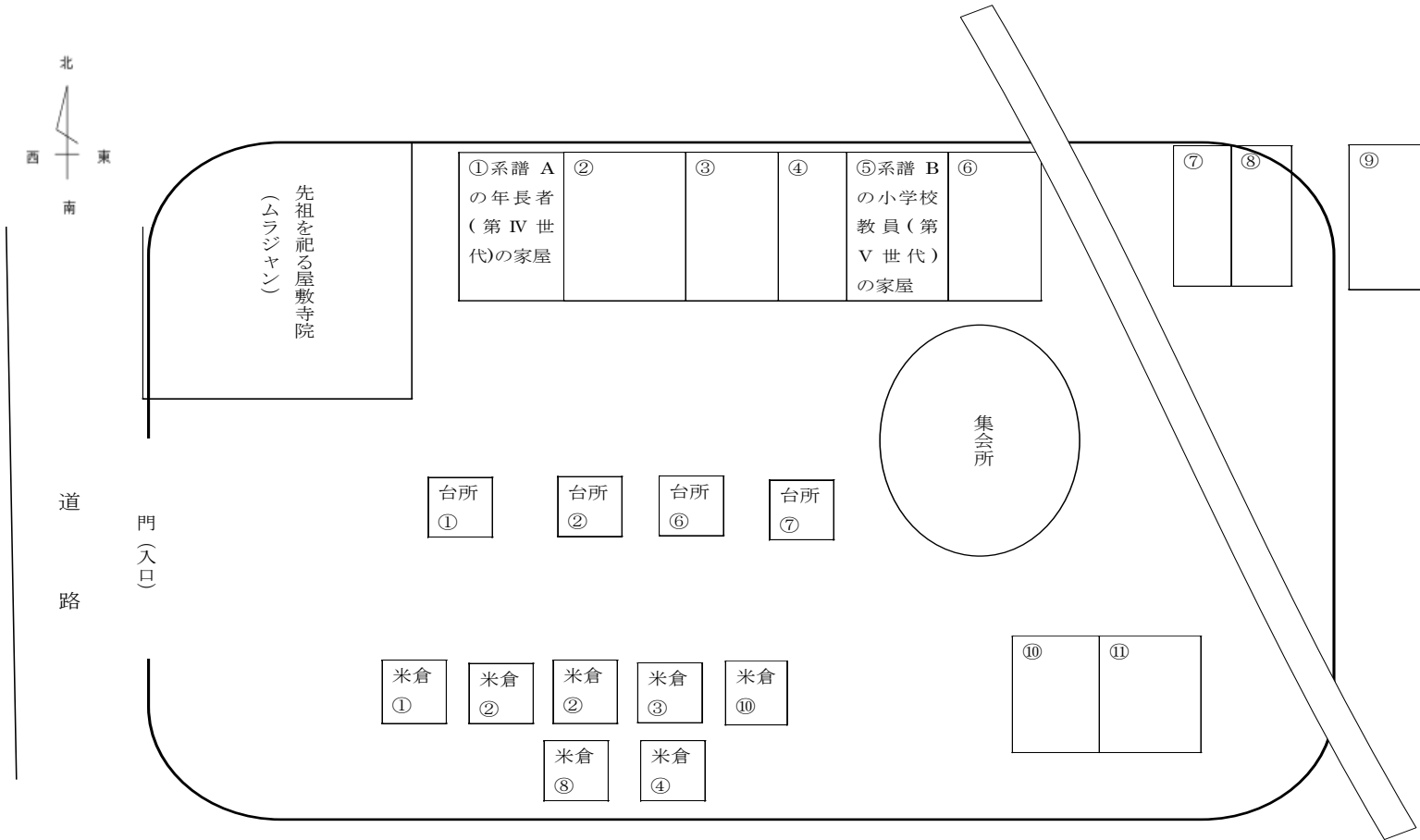
第Ⅰ世代の高祖父には180アールの水田を所有していた。高祖父には、息子(第Ⅱ世代)が3人いたので第Ⅱ世代の曾祖父の世代の息子たちは60アールずつ分割相続した。本人は高祖父の長男(第Ⅱ世代の曾祖父)の系譜(Aの系譜)。第Ⅱ世代の曾祖父(高祖父の長男)は息子が2人いたが、高祖父の次男夫婦に子供がいなかったため、曾祖父の次男が養子に入る(Bの系譜)。第Ⅱ世代の三男(Cの系譜)には息子が2人いたので、第3世代の息子たちは30アールずつ水田を相続した。第Ⅳ世代のAの系譜(本人の父)は一人息子だったので60アールの水田を相続した。だが、病気で、治療費と子供の学費のために借金して、Bの系譜の第Ⅲ世代の父の従弟(父の叔父の息子＝血縁的には父の弟なので本人の叔父＝B1の祖父かつB2の父)に20アール売却。残りの40アールもCの系譜の第Ⅳ世代の屋敷地のメンバー(C1の父とC2)に20アールずつ売却。Bの系譜の第Ⅲ世代の養子は相続した60アールの水田に購入した20アールを加えて80アールの水田を所有しており、息子が4人いた。Bの系譜の第Ⅳ世代の長男はスラウェシに移住し、三男は婿にあって婚出したので、次男と三男が80アールの水田を40アールずつ相続した。第Ⅳ世代の次男の子供は娘2人なので次女が婿をもらい第5世代の次女夫婦(B1)が40アールの水田を相続。第Ⅳ世代の4男夫婦家族は未婚の子供が3人(B2)。Cの系譜(高祖父の三男)は、第Ⅱ世代の曾祖父には息子が2人だったので30アールずつ相続した。第Ⅲ世代の長男も第Ⅲ世代の次男も息子は一人なので、第Ⅳ世代の男子はどちらも水田を30アール相続した。またどちらもAの系譜の水田を20アールずつ購入したので50アールの水田を相続。第Ⅲ世代の長男の息子(第Ⅳ世代)は、子供が5人で全員娘だった。第Ⅴ世代の次女は死亡。長女も三女も四女も婚出したので、五女が婿をもらった(C1)。長女は結婚してスラウェシ居住。三女(屋敷地①のインタビュー対象者の妻)と四女(隣の屋敷地)は結婚してバンジャールAに居住。C1の五女は40(50?)アールの水田を相続したが、夫(婿)が病気で死亡。五女の両親も死亡している。五女はスバックのメンバーで、農業をしながら隣の屋敷地の姉夫婦の力を借りながら、三人の子供(長男、長女、次男)を養育。第Ⅲ世代の次男の息子(第Ⅳ世代)夫婦家族(C2)は未婚の娘が2人。50アールの水田を相続。

# 事例7:バンジャールAの屋敷地⑬

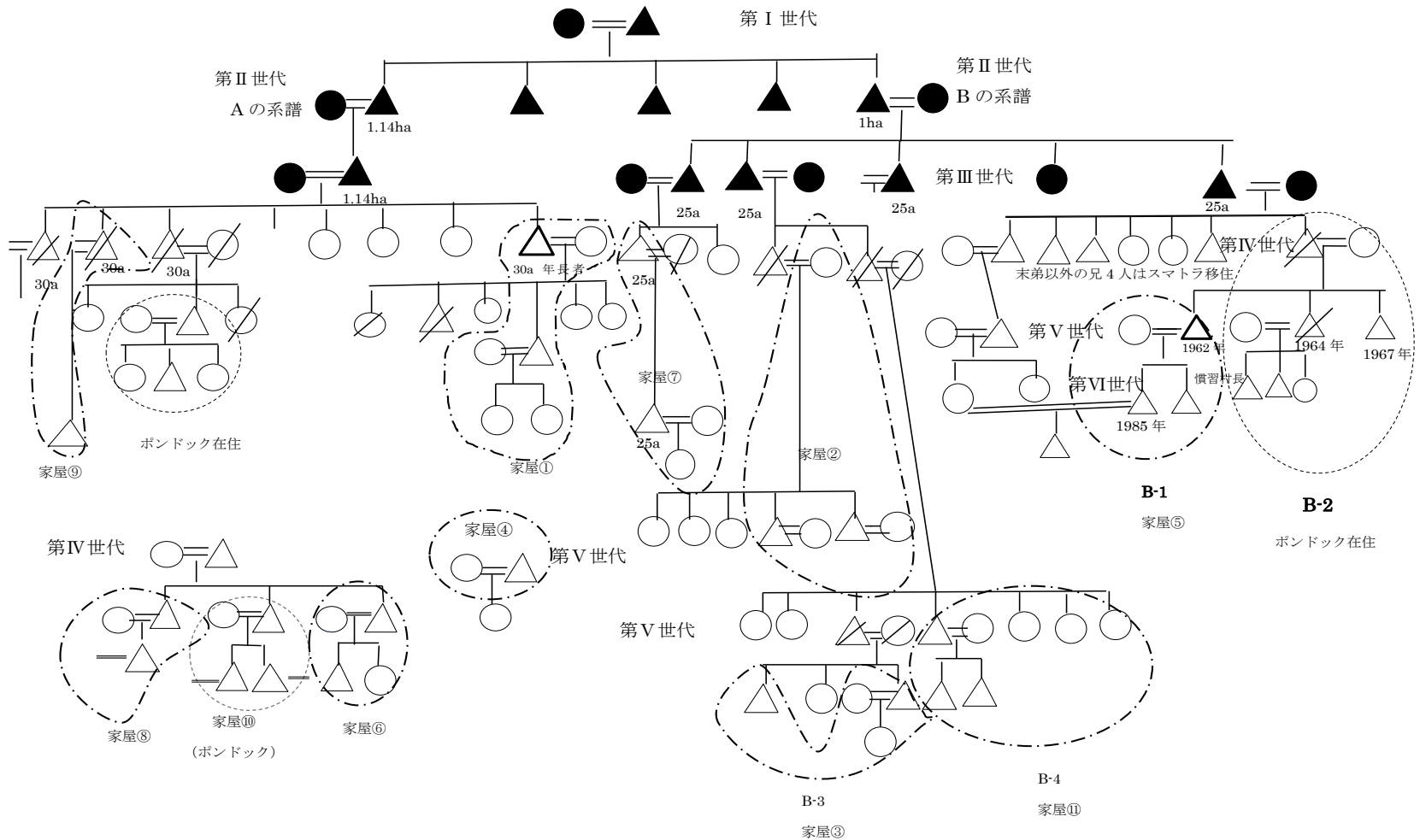
## (ダディア・マヌカン(M))

- インタビュー対象者:1990年代は60アールの水田の自作だった。父が病気で農業ができず売却した。売却先は、同じ屋敷地の父の従弟(Aの系譜の第Ⅲ世代に20アール)とBの系譜の第Ⅳ世代の兄弟(40アール:各20アール)。同じ父方親族の財産であることは変わらない。Satu Bagi Waris(財産はひとつ=共有財産=財産共有集団)という考え方がある。バリの慣習で、理想としては同じダディアのメンバーに売ったほうがいい。まず、ダディアで会議を開く。同じダディアのメンバーが購入できないとなると、財産がダディアの外に行くこともある。ダディアの外でも高く買ってくれる人があれば売る。
  - 祖母の火葬儀礼を15年間だせなかった。
- ダディア・マヌカンについて:クルンクルンから移住してきたときにこちらが皆スードラだったのでスードラになった。

# 事例8:バンジャールBの屋敷地①(ダディア・ブジャンガ(B))



# 事例8：バンジャールBの屋敷地①の家系図 (ダディア・ブジャンガ(B))



## 事例8:バンジャールBの屋敷地①(ダディア・ブジャンガ(B))

- インタビュー対象者:家屋⑤1962年生(第V世代), 小学校教員, 慣習村長(2011~2015)+家屋①第IV世代の年長者

家屋数が多い大きな屋敷地

屋敷寺院(ムラジャン, 山側・門側)

米倉と台所は海側

家屋の位置は長男が門側で次男以下は順に門から離れる

男子均分相続,

男子が多い, 開墾移民, 末子の残留と親との同居のケース, 親が未婚の子供とポンドックに分出するケース

(老親の扶養よりも男子の一人は屋敷寺院の儀礼のために残留)



事例1のグヌンサリ・デサ部落の大きな屋敷地と, 屋敷寺院の呼称(サンガ)以外は, 屋敷地内の配置, 相続, 老親との同居, 職業, 経済状況などバンジャールやカスタ(位階)による違いはない。



## 事例8：バンジャールBの屋敷地①結婚 (ダディア・ブジャンガ(B))

- スマトラに移住したハトコと結婚
- 長男＝ハトコの婿、次男＝デンパサールで学生結婚
- 本人(インタビュー対象者)の長男(1985年生)が南スマトラ在住の父方のハトコと結婚。ハトコの親は、子どもが娘二人なので婿を探していた。
- スマトラに移住した本人の父の兄弟たちは、開墾に成功し、スマトラのバリ・ヒンドゥーの移住者のバンジャールのメンバーになっているので、こちらのバンジャールで火葬式をすることはない。だが、出自の屋敷寺院の大きな儀式のときには帰省する。本人のイトコ(父の兄弟[長男]の息子)は娘が2人しかいない。儀式の時に、バリに帰ってきて婿を探していた。本人の息子(長男)を気に入り、スマトラに来ないかと誘った。最初息子は乗り気でなかったが、スマトラに遊びに行くうちに、広大な畑とりっぱな家屋が気に入り、結婚(2004年)。2006年孫(長男)誕生。  
婿に行ったというのか、嫁をもらったと考えるのかどちらともいえない。本人の孫は兄たちと一緒にスマトラに移住したが父の生まれ変わり。
- 長男はスマトラに婿にいったので、こちらのアダットの正式なメンバーではない。現在のアダットのメンバーは次男夫婦(2016年に学生結婚。妻はタバナン県プヌブル郡Wangaya出身)。デンパサールに住んでいるので、儀式の準備の作業や選挙は、次男夫婦に代わって本人夫婦が参加する。女性の作業は、次男の妻の名前のところに、本人の妻が記帳する。

# 事例9:バンジャールBの屋敷地⑤

## (ダディア・ブジャンガ(B))

### ◇埋葬地に近い屋敷地

- ・ インタビュー対象者:1965年生、47才。小学校卒。自作0 小作40アール
- ・ 屋敷地27アール。7世帯居住。米倉6  
この屋敷地の祖先は曾祖父から始まる。曾祖父はバドゥン県のMengwi Taniから移住してきた。グヌンサリ慣習村の最後のメンバー。当時の慣習村長から屋敷地をもらえた(居住の許可をもらえた)。だが、水田はもうなかった。この屋敷地のメンバーは、全員水田を所有していない。ダディア・ブジャンガのメンバーだが、ブジャンガの系譜図は多くの枝に分かれており、この屋敷地のメンバーは最末端の系譜に位置づけられる。なぜ曾祖父がこちらに移住してきたかという理由の真偽は分からない。かけ事が好きで出身地の村で嫌われたのではないかと推測している。
- ・ 曾祖父には息子が2人いた。曾祖父の長男(本人の祖父の兄)は結婚したが、子供がないまま亡くなった。本人の祖父は曾祖父の次男。この屋敷地に居住しているのは、全員祖父の子孫。  
祖父には子供が6人いる。祖父の第1子は長男(本人の伯父)。第2子の次男が、本人の父。第3子の長女と第4子の次女は結婚して他出。第5子の三男(本人の叔父)は、インドネシアの人口移動プログラムでスラウェシに移住。第6子の三女は独身。祖父の第1子の長男(本人の伯父)は死亡したが、子供が6人で男子は3人。本人の伯父の長男は結婚して、母と妻と子供(長男と長女)5人で屋敷地の家屋に居住(妻の水田の小作10アールと兼業の大工)。本人の伯父の次男は結婚して、子供(長男と長女)がおり、子供(長男)が結婚して孫2人(長男と長女)がおり、屋敷地の家屋に居住(小作50アール=80アールの所有者と同じ+兼業)。本人の伯父の三男は死亡したが、娘が婿取りし、娘夫婦と娘の母と子供(長女)の4人で屋敷地の家屋に居住(農業はせずに彫刻ができる専業大工)。  
本人の父(祖父の第2子の次男)には、息子が4人おり、本人は長男。結婚して子供が2人(長男と長女)。本人の両親はともに健在。慣習村やバンジャールのメンバーは、本人が結婚したのでリタイアした。本人の長弟(父の次男)は結婚して子供が3人(長女と次女と長男)で屋敷地に居住(小作と大工の兼業)。本人の仲弟(父の三男)は結婚して子供が2人(長男と次男)で屋敷地に居住(小作と大工の兼業)。本人の末弟(父の四男)は、結婚して子供が3人(長女と長男と次男)。本人の末弟は、デンパサールで運転手や公園の清掃の仕事をしており、家族だけが屋敷地の家屋にいる。
- ・ 家族6人(本人, 妻, 長男(1988生(小学校非常勤講師、青年団、大卒), 長女[1998生, スンガナン中3年], 父, 母)
- ・ 本人の父は、小作ではなく農業雇用労働者。その頃のG慣習村は、村外で働く人はおらず、皆自作(農業)だったので小作はいなかった。子供のころから父と一緒に農業をして見習い覚えた。
- ・ 今は水田を購入しようと思えば購入できる。だが、将来の長女の学費の必要を考えると購入は難しい。ジャティルイは高校から下宿させるのでお金がかかる。子供を中学に行かせるのは、学費とバイクが必要。子供は小学校5年からバイクに乗る。借金の質として水田を預けたり、売却する理由は、病気の治療費もあるが子供の学費のためという理由が多い。

# 事例9：バンジャールBの屋敷地⑤ (ダディア・ブジャンガ(B))

- 小作人(農地の無所有と屋敷地の配分)
- 当時のバンジャール長(アダット)の許可で屋敷地を分与
- ダディア・ブジャンガのメンバーと血縁関係はない。父系親族とはいえない  
(同血縁ではないことは本人・屋敷地の親族だけでなくバンジャール(ダディア)内で共有されている)
- 配偶者は、同じバンジャールB(ダディア・ブジャンガ)のメンバー

# 事例1～9:バンジャールとダディア

## ◇ダディアとカスタ

- 2つのバンジャール間では、カスタが違うのでバリ語の敬語や敬称を使う。  
G慣習村では、2つの部落の屋敷寺院を、貴族層と平民層の屋敷寺院の名称区分にしたがって呼ぶ(バンジャールBの屋敷寺院はムラジャン、バンジャールAの屋敷寺院はサンガ)。  
慣習村の会計簿に記載されるメンバーの名前につける敬称も、バンジャールAのメンバーはパツ(Pa)、バンジャールBのメンバーはグル(Guru)と記載して区別している。言葉遣いやふるまいも異なり、バンジャールBの住民に対してバンジャールAの住民は、上位のカスタに対する丁寧な言葉遣いやふるまいがなされていた。バンジャールAの住民同士は隔たりのない親密な言葉遣いやふるまい(インドネシア語ではなくバリ語の世界)
- 婚姻については、どちらの部落も、進学や就職で出会いの場が広がることで通婚圏が広がっていた(ジャワ人やバリ州の別の県出身者との結婚)。だが、2つのバンジャール間の婚姻は見られなかった。バンジャールBの男性がバンジャール出身者以外の女性と結婚しているケースは、村外の遠方の女性であることが多い。どちらのバンジャールも、今日でもなおバンジャール内の婚姻が多い。バンジャール内の結婚に次いで多いのは、バンジャールAでは、隣の慣習村のバンジャール出身者との結婚である。バンジャールBでは、隣の慣習村のバンジャールとの結婚は見られなかった。
- 世帯、相続(男子均分、養子、婿)、屋敷地の配置、職業、学歴など生活慣行や経済状況に違いはない。
- この2つのバンジャール(部落)は、慣習村の3つの寺院と集会所(寺院を含む)と共同埋葬地と小学校を共有しており、区別はあっても顕著な対立は見られなかった。  
行政村や慣習村の役職者(ダディアとの関わり、2つのバンジャール間の調整)  
→ 対立は、ジャティルイ行政村内の2つの慣習村間で顕著(永野2016)。
- 財産共同体としてのダディアの性格:ダディア・マヌカンの事例、バンジャールBでは、水田の売買や移動が、すべてダディア・ブジャンガ(バンジャール)内で完結していた。  
=バンジャールBの住民の先祖代々の水田が属する水利組合(ジャティルイ水利組合の下部組織であるB水利組合のメンバーは全員バンジャールBの住民)

# まとめにかえて

- グローバル・ツーリズムと「緑の革命」: 商品経済がバリ・ヒンドゥーの生活に浸透
- バリ・ヒンドゥーの生活(アイデンティティとエートス):
  - ①生産(仕事・農業)②行政(ディナス)③慣習・宗教(アダット)のなかで
  - ③の占める比重の大きさ
  - 儀礼・祭礼, カスタ(階層)と称号集団 → 社会的威信
- 父系的と双系的(婿), 父方親族と母方親族(バンジャール内婚)  
同血縁の意識(ダディア・屋敷地出自の親族), 父系的親族集団と近親関係,  
近隣居住の重要性

# 参考文献

- Geertz, C. (1963) *Peddlers and Princes*, Chicago, The University of Chicago Press
- Lansing, S (1974) *Evil in the morning of the world*, Ann Arbor, Center for South and Southeast Asian Studies, The University of Michigan
- Warren, C. (1993) *Adat and Dinas: Balinese Communities in Indonesian State*, Kuala Lumpur, Oxford University Press
- ギアツ&ギアツ(1989)『バリの親族体系』みすず書房(Geertz, H and Geertz, C. (1975) *Kinship in Bali*, Chicago, The University of Chicago Press)
- 鏡味治也(1992)「ジャカルタのバリ人」『東南アジア研究』30巻3号
- 鏡味治也(2000)『政策文化の人類学』世界思想社
- 坂根嘉弘(1996)『分割相続と農村社会』九州大学出版会
- 坪内良博・前田成文(1977)『核家族再考』弘文堂
- 内藤莞爾(1973)『末子相続の研究』弘文堂
- 中谷文美(2003)『「女の仕事」のエスノグラフィー』世界思想社
- 中谷文美(2012)「都市の家族、村の家族」(鏡味治也編)『民族大国インドネシア』木犀社
- 中谷文美(2014)「バリ島農村の結婚事情」『アジア研ワールド・トレンド』No226, 14-16
- 永野由紀子(2012)「インドネシア・バリ島の水利組合(スバック)における人間と自然の共生システム—タバナン県ジャティレイ村の事例—」『専修人間科学論集』vol2, No2 81-98頁
- 永野由紀子(2016)「世界遺産登録後のバリ島ジャティレイ村の変化—慣習村間の対立と『多元的集団構成』」『専修人間科学論集』vol6, No2, 27-41頁
- 永野由紀子編著(2018)『年報村落社会研究; イエの継承・ムラの存続』54号, 農山漁村文化協会
- 永野由紀子(2022)「バリ・ヒンドゥー村落における家族と屋敷地共住結合」『比較家族史研究』第36号, 56-88頁
- 永野由紀子(2023)「バリ・ヒンドゥー村落の近隣集団」『専修人間科学論集』vol13, No2, 17-34頁
- 永淵康之(2005)「宗教と多元化する価値: インドネシアにおけるヒンドゥーをめぐる境界線を定める闘争」『国立民族学博物館研究報告』29巻3号
- ニ・ヌンガ・スアルティニ(2015)「世界遺産と観光振興」『専修人間科学論集』vol.5, No2
- 間苧谷榮(2000)『現代インドネシアの開発・社会変動』勁草書房
- 水野浩一(1981)『タイ農村の社会組織』創文社
- 吉田禎吾編著(1992)『バリ島民』弘文堂
- 吉田禎吾監修(1994)『神々の島バリ』春秋社